



造園

ものづくりマイスター派遣先

兵庫県立龍野北高等学校

〒679-4316 兵庫県たつの市新宮町芝田 125-2

概要 (H29.7 取材当時)

学校長——前田 達也

沿革——平成20年 龍野実業高等学校と新宮高等学校との発展的統合により開校
平成21年 現校舎に移転

学科——電気情報システム科、環境建設工学科、総合デザイン科、看護科（5年一貫教育）、総合福祉科、商業科（定時制）

卒業生総数—1,748名

教職員数—90名



建設における環境の意味を理解するため、造園の「ものづくりマイスター制度」を導入

龍野実業高等学校と新宮高等学校が発展的に統合したことで誕生した龍野北高等学校は、工業系の学科から福祉、看護の学科までを擁しています。こうした中で、龍野実業高等学校にあった土木科と建築科を環境建設工学科として再構成するにあたり、生徒が建設という分野を幅広い視野で体験し、知ることができるようなカリキュラムの編成に取り組んできました。特に、建設における環境の意味を理解するための課題研究の一環として、造園分野のものづくりマイスターに指導を仰ぐこととしました。



前田マイスターの指導の様子

カリキュラム

	指導日	指導内容
1	H29 5/11	それぞれの植物の特徴把握
2	5/25	整地後、竹外部分の指導
3	6/1	縁石と敷石のポイント指導
4	6/8	シュロ縄の括り方、水糸の張り方を指導
5	6/15	それぞれの植物の特徴把握 総括復習
6	6/22	
7	6/29	各人の弱点部分強化の指導及び練習
8	7/13	
9	7/20	
10	7/27	各人の弱点部分強化の総括指導

期間	平成29年5月～7月
実施場所	兵庫県立龍野北高等学校
受講者数	11名

受入担当者の声 | 吉田 憲弘 環境建設工学科 教諭

教師の指導とものづくりマイスターの指導が有機的に絡み合うことで大きな成果が現れる



前田マイスターの指導の仕方は教師にも刺激を与える

本校の環境建設工学科は、前身の実業高校にあった土木科と建築科を統合してできたものです。この学科のカリキュラムには、環境緑化、公園整備、堤防、デザインなどの要素がありますが、これらの要素を括る一つの枠組みとして「造園」というものを考えました。

ものづくりマイスターに指導していただく前から、課題研究の一環として、近くの文化会館の公園を生徒が整備するという行っていました。こうした取り組みを実施するうちに、基本的な知識、技能の必要性を感じ、「造園」を学ぶこととなったのです。もちろん、木工、建築大工などの分野にも力を入れています。

環境建設工学科では、課題研究として5つのテーマを挙げていますが、このうち、建築大工と造園のものづくりマイスターの派遣をお願いしています。

前田マイスターの指導の様子を見ていて感じるのは、私たち教員の指導の仕方が、いかに学校という枠に縛られているかということです。前田マイスターの指導を見ると、課題研究の本来の在り方だと思います。実践的な指導のなかで必要な基本事項をしっかりと伝え、そのうえで、生徒の自発的な取り組み姿勢を引き出しています。教員である私たちにとっても良い勉強の機会ですね。

生徒の個性を素早く見抜き、効果的に指導

前田マイスターに敬服するのは、短い時間で生徒の個性を的確に見抜いてしまうことです。しかも、教員から見た生徒ではなく、造園マイスターとしての目をもって生徒を見るので、私たちにとっての生徒の見え方に奥行きが出てきます。

また、指導の仕方も巧みです。指導の目標は、造園技能士3級レベルの知識と技能を身につけることですが、指導を受けた後に挑戦する生徒が2名出てきま

した。造園の知識として樹木の名称を正しく知っているかどうかなどが重要ですが、検定を目指す2人以外の生徒も80%以上の理解度に達しています。私たちは、半分できれば良いほうだと想定していたので、驚きました。前田マイスターの指導をとおしてしっかりと知識が根づいていることを実感します。

凄いマイスターに出会った体験は、社会に出た時に必ず役立つ

生徒の多くは、卒業とともに社会人として巣立っていくわけですが、ものづくりマイスターという社会の先輩に接することの意味も大きいようです。マイスターという凄い人に出会い、真剣に学ぶことで、生徒の内面に社会に巣立つことの意識が培われているのでしょう。インターンシップと合わせて、学校だけではできない貴重な教育になっていると考えています。



前田マイスターの指導の様子



実習中の名村さん(左)と釜井さん(右)

ものづくりマイスター 前田 政志

覚えさせるのでも教えるのでもなく、人を育てるという姿勢が重要だ



造園の指導をととして社会人としての在り方を伝える

龍野北高校では、ものづくりマイスターとなる前から、環境建設工学科の課題研究の指導を行っています。学科長のパワーに押されて引き受けた感じですね。しかし、高校生を指導するのは初めてのことなので不安だらけでした。高校生の指導となると、自社の社員の指導とは、また別な指導の仕方が必要だと考え、悩みました。

ものづくりマイスターとなり、再び指導を行うにあたって自分なりに出した方向性は、生徒には、造園の指導をととして、社会人としての在り方を伝えていくことでした。1学期に基本の指導を行い、2学期には校外で実践的な指導をしますが、そのなかで、社会人としてのマナー、自己啓発の大切さ、ものづくりの情熱などを身につけてほしいと考えたのです。

自分で考え、結論を出し、それに責任を持つことを知ってほしい

教える時には、手取り足取りの教え方ではいけないと思います。生徒が自分で学ぶ姿勢を持つようにしていくことが大切です。そして、いつでも気兼ねなく質問できる雰囲気をつくるように気を配っています。技能を伝えることと、覚えさせることとは違います。人を育てるという気持ちで、生徒が自分で考える姿勢を身につけていくことが重要です。

指導の具体的なテーマは、造園技能士3級レベルへの到達です。そうすれば、造園にとって必要な基本的要素が身につきます。10回の指導をととして、生徒全員をそのレベルに到達できるようにするわけです。そのためには、ただ聞いて覚えるだけではだめです。自分で考える姿勢がなければなりません。

与えた図面どおりに仕上げるには、クオリティを確保し、工程を管理し、時間内に終えなければなりません。言い換えれば、自分で考え、結論を出すことが求めら

れています。このことは、造園だけでなく、どんな仕事にも通じることです。

生徒一人ひとりの個性を受け入れる

実際の指導場面では、やはり、生徒の個人差という問題に直面します。個人差といってもいろいろな尺度がありますが、私が注目しているのは集中力の違いです。集中力のある子はどんどん先に行きますが、そうでない子は伸び悩みます。そういう子には、声を掛け、少しリラックスさせるなどして集中力の回復を待つようにします。どうしても集中できないときには、きちんと叱ることも忘れないようにしています。

人を育てるには、育てる側の意識改革が必要

「ものづくりマイスター制度」の役割は大きいと感じています。私が造園の世界に入った頃は、先輩や師匠の仕事を見て、盗んで、覚えろ」というような時代でした。それはそれで一つの学び方ではあると思いますが、若い人を「育てる」という意味では、教える側の意識改革と方法論が必要です。造園業も後継者不足に悩んでいます。せつかくこの世界に進んできた人たちをしっかりと育てていくためには、やはり、教える側が人を育てるということの意味を真剣に考えるべきだと思います。これは、造園の世界に限らず、今の時代全体に重要なのではないのでしょうか。

前田マイスターの指導の様子



ものづくりマイスター
前田 政志 (まえだ まさし)
昭和34年(1959年)生まれ
平成1年度 1級技能士 造園(造園工事作業)取得
平成26年度 厚生労働省ものづくりマイスター(造園)認定

受講者の声

指導を受けることでできなかったことができるようになる



前田マイスターの指導をととして、社会人としての態度に気づいた

造園には、ルールがあります。更地から始めて杭を立てるまでの間の手順、植栽するときの樹木の向き、石を敷くときの地面からの高さなど、細かいところに気を使っていかなければなりません。

実際に造園という仕事を学んでみると、旅行先で庭を見たり、近所の庭を見たりしても、今までとは違う見方をするようになりました。庭づくりのルール、知識を前田マイスターに教えていただいているので、石の並び方などにも目が行くようになったのです。それに、いろいろな樹木の名前を知ると、今までただの木でしかなかったものが、もっと親しいものと感じられるようになってきます。

前田マイスターの指導をととして、造園の知識以外のことも学びました。僕たちは、卒業後、就職して社会人になっていくわけですが、社会人としてのマナー、態度などを意識するきっかけになりました。特に大切だと考えているのは、主体的に行動することです。前田マイスターの指導の仕方も、あれをしなさい、これをしなさいと細かく指示するのではなく、自分で考えて動くようにしてくれていたのだと、今では理解できるようになりました。(釜井さん)

自分で考える姿勢は、他の科目の勉強にも役立つ

造園という仕事に馴染みはありませんでしたが、



名村 祥太さん



釜井 祐輔さん

前田マイスターから庭の型、庭の歴史などの話を聞き、実際に指導を受けているうちに自然と理解が進んでいきました。

造園について何も知らない、ゼロの状態からスタートするということは、自分で考えながら作業することだだと思います。この作業が終わったら次はどうするのかを想像しながら、一つひとつ進んでいった感じです。この経験は、他の科目の勉強にも役立っています。例えば、数学の公式を導き出す場合などでも、これをこうしたら次はどうなっていくかを、自分なりに考えながら進めていくようになりました。また、わからないことを質問する場合でも、ただ答えを聞くのではなく、自分なりに考えながら説明を聞く態度に結びついています。

自分で考えるという姿勢は、いろいろな場面で重要なことだと理解できました。僕は、テニス部に所属していますが、部員数は多くありません。そうすると、少ない人数で効果的な練習をするにはどうしたらいいのか、試合の時にどのように戦っていけばいいのかなどの課題について、誰かの指示を待つのではなく、自分で考えて提案するようにしています。(名村さん)

地域技能振興コーナー担当者より

兵庫県地域技能振興コーナー
コーナー長 河合 弘幸

若年技能者
人材育成推進員
陣東 利治

兵庫県には、工業など産業系の高校が20校ほどありますが、ほぼ全域の学校から指導の依頼をいただいています。「ものづくりマイスター制度」の効果がしっかり認識されていると感じます。

この制度では、マイスターの専門分野の知識や技能

を学べるだけでなく、高校生が社会人に接し、社会人としての在り方の基本を学ぶ機会も提供できます。今後も幅広い分野で活用していただきたいと考えています。